

21世紀日本への期待

取締役副社長
経営戦略本部長

山内 拓男

Takuo Yamauchi
Executive Vice President & Director

古来われわれ日本人は、新しいものと便利なものに対しては総じてそれらを善なるものとして受容し、外来物や新しい事物を割合柔軟に取り入れてきた。しかも、そのまま鵜呑みするのではなく、自分たちの感性に合うよう抜け目なく作り替えもしてきた。このことは日本人のバランス感覚の有り様も示している。つまり、新しい事物を単にめずらしがり屋として取り込むだけでは厚みのある科学・芸術の進歩にはつながらない。日本の今日あるのは、温故知新とも言うべきか、古きをしっかり踏まえ新しきへの真に深い興味関心を芽生えさせる何かが健全に作用してきた証左であると私は思う。ただ、こうした作用も近年弱体化しており、日本のルネッサンスを目指した梃子入れが望まれる。

さて、少々話は古いが、1980年代後半に私は弊社ロンドン事務所長として英国に滞在する機会を得た。ある時、昼食テーブルを囲んだ折り、たまたま相手のビジネスマンがオックスフォード大学の某カレッジで歴史学を専攻した人であったことから、話が世界の四大文明発祥地のことに及んだ。われわれ日本人の多くは、受験勉強で鍛えられているせいか、即座にエジプト、メソポタミア、インドそれに中国がそれらであるとまるで公式のように頭に浮かんでしまう。ところがくだんの英国人は、紀元前3千年あたりのクレタ島を中心とした東地中海地域から話を起こし、それが今日のヨーロッパあるいは世界の文明形成にどう影響しているかを語り始めた。もちろんインドや中国も一応念頭にはあったものの、いわば辺境の話といった扱いである。そして、自分たちの文明のよって来る所に軸足を置いて語る歴史観には十分な説得力があった。彼の説明は恐らく日本の大学受験では正解とはならないだろうが、私は自分の丸暗記的な知識の浅薄さを大いに恥じたものである。

英国の歴史を振り返ると、紀元前1世紀半ばのジュリアス・シーザーによる2度にわたる遠征あたりが記録としては最古で、その後紀元1世紀半ばから5世紀初頭までの約400年に及ぶローマ帝国支配の後、ヨーロッパ各地から幾多の民族の侵入が繰り返された。記録



文物に基づく歴史の長さは日英間に大差はないが、外国の歴史に対する教育姿勢にはかなりの差があると感じた。もちろんこれは私個人の印象に過ぎず一般化はできないが、たまたま私の息子の通った私立現地校では、小学校6年相当の生徒がちょうど1年かけて16世紀のチューダー王朝を中心とする前後300年ほどの英国史をかなり深く勉強していた。しかも、折にふれ実証的な学び方もとりいれており、例えば、1666年のロンドン大火の記念碑に行きその記念碑の先端を倒した位置に当時あったパン屋が出火場所だったことを自分の目で確認させたり、いかにペストが猛威をふるったかを博物館を訪れて学ばせるといった具合であった。

一方、我が国の例を挙げれば、明治維新直後、岩倉具視ら46名による米欧使節団は、1871年12月に横浜を出航して約1年半にわたって米欧をくまなく調査見聞している。使節団の報告書である回覧実記は、当時の日本の伝統的世界観に立脚しながらも、いかにして西洋文化を理解し何を受容すべきかの取捨選択を述べている。そしてその考察は、政治、経済、社会、思想、宗教、文化などあらゆる分野に及んでいる（岩波新書、田中彰著「明治維新と西洋文明」）。事前情報に毒された予見を持つことなく、まさに新鮮な現地現物アプローチによって若者達がこれらを観察したことはその後の日本形成に大きな影響を与えたと思う。恐らく彼らは、単に西洋文明に圧倒されるのではなく、日本の伝統を基軸に踏まえていたからこそ、新しい事物を冷静に見つめ確かな興味と関心を発展させたに違いない。

私は、温故知新とは自らを客観的に観測することでもあり、これをおろそかにしないことが新しい発展へのインスピレーションを生み、大局的世界観に根ざした発想を育むのだと解釈したい。往々にして古い伝統に深く接してきた人が最も斬新な考えを打ち出すものである。21世紀日本に若い世代のインスピレーションが縦横無尽に飛び交えるよう、今から教育の土俵造りを急ぐべきである。